

一九七七年以前出土の木簡(六)

奈良・平城宮跡(第三次)

- 1 所在地 奈良市佐紀町・二条大路南二丁目(旧北新町)
- 2 調査期間 一九六五年(昭40)一月～一九六六年(昭41)四月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 榎本亀治郎
- 5 遺跡の種類 宮殿・都城跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

平城宮跡第三二次発掘調査区は、宮城東南隅部分と、その外側の東一坊大路と二条大路の交差する地域(地区名6AⅠ区)にあたる。当時、国道24号線バイパスが当該地の一部を通るように計画されたために発掘調査が実施された。

調査で検出された主要な遺構は、東一坊大路路面敷とその東・西両側溝(西側溝は宮東面外堀にあたる)、二条大路路面敷とその南・北

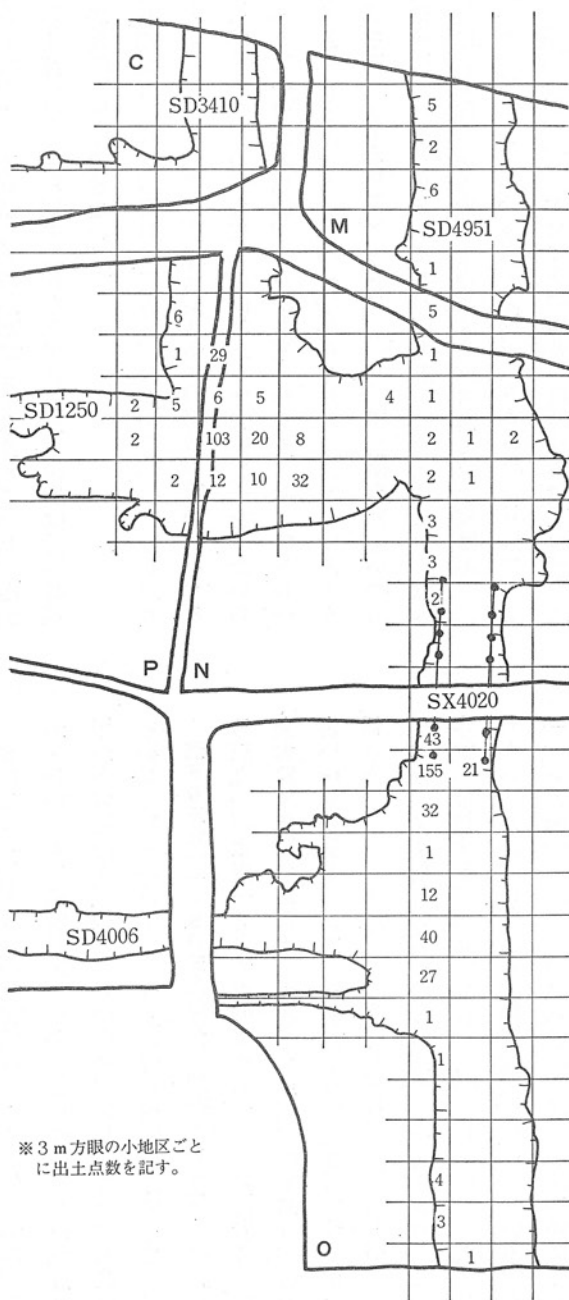
両側溝(北側溝は宮南面外堀にあたる)をはじめとして、宮内から宮南面外堀への排水のための南北溝、東一坊大路両側溝を渡するため二条大路に架かっていた橋、その一部が調査区に含まれる左京三条一坊十六坪・二坊一坪内の掘立柱建物四棟、柵、井戸などである。

木簡の当該調査区出土点数は六三九点であるが、木簡出土遺構(すべて溝)との関係は次のとおりである。

当地区出土木簡の過半三八二点は、宮東面外堀で東一坊大路西側溝にあたるSD四九五一から発見された。その他、宮南面外堀で二条大路北側溝にあたるSD一二五〇に宮内から南流するSD三四一〇が合流する付近から二四三点と集中している。SD一二五〇では調査区西端で一点出土をみた。また、二条大路南側溝SD三九〇五と東一坊大路東側溝SD三九一一は、ともに調査区東辺部で検出した素掘り溝であるが、SD三九〇五から一点、SD三九一一から一二点の木簡が発見されている。

以下、木簡出土遺構の概要を述べることにしたい。

溝SD四九五一 平城宮東面外堀かつ東一坊大路西側溝にあたる



第32次調査区木簡出土状況図

南北溝である。素掘りで溝幅は一定しないが、最大幅で一〇m、最小幅で四・八mを測り、深さは一・二m前後である。溝堆積土は、上層から暗灰色土、粘土混細砂、粗砂の三層に分けられる。木簡は溝全域から出土したが、とくにSD四九五一をまたいで二条大路に架かっている橋SX四〇二〇の橋脚付近から二〇九点、またSD四

九五二に二条大路南側溝SD四〇〇六が注ぎ込む付近から一四点集中して発見された。橋SX四〇二〇は、橋幅一三・四m、長さ三・八mで、橋杭七本の橋台二基からなり、三回の改修がみられる。なお付近より瓦製擬宝珠が出土している。SD四九五一の流れは、SX四〇二〇付近で水が淀んだためであろうか、溝側壁に有機物が

堆積層をなしており、木簡はその堆積層に多く含まれていた。出土層位は、粘土混細砂、粗砂層の二層からであるが、両層は近い時期の堆積で時期的区別はできない。

なおSD四九五一には、SD一二五〇、SD四〇〇六、SD三九五六（SD四〇〇六の南六mを平行する東西溝）の三条の溝が流入するが、SD四〇〇六、SD三九五六の両溝からは木簡出土をみないの
で、SD四九五一出土木簡は、SD四九五一の上流、およびSD一二五〇とそれに注ぎ込むSD三四一〇から流れ込んだものであろう。

溝SD一二五〇・SD三四一〇 SD一二五〇は宮南面外堀かつ二条大路北側溝にあたり、東流してSD四九五一に流入する。またSD三四一〇は宮東面大垣の内側を南流する排水溝で、上流は第二二次南調査（6AAE・AF区）、第二九次調査（6AAG・AH区）（ともに『木簡研究四』参照）や、本号にその概要を収録する最近の第一五四次調査（6AAD区）でも検出され、いずれも木簡出土をみており、その下流は当該調査区でSD一二五〇に合流している。SD三四一〇が南面大垣を通過する部分については、大垣の痕跡が東端では崩壊した状況で途切れているため、いかなる形態であったかは明らかでない。なおSD三四一〇には、第三二次補足の発掘調査で検出された南面大垣の北雨落溝SD四一〇〇も西から流入しているが、その雨落溝からは削屑が多く占めるとはいえ、考課関係の木簡など、一三〇〇〇余点もの木簡出土をみている。

SD三四一〇がSD一二五〇へ合流する付近から、SD一二五〇がSD四九五一に注ぎ込む間の堆積土は、SD四九五一と同様に上層から暗灰色土、細砂、粗砂層の三層からなり、木簡は下層二層から発見されているが、これまた時期的区別はできない。

溝SD三九一一・SD三九〇五 調査区東辺部で検出した南北溝SD三九一一は東一坊大路東側溝にあたり、東西溝SD三九〇五は二条大路南側溝にあたる。両溝とも新旧二時期あり、各々が接続する。古い時期の溝SD三九一一Aは二条大路を横断するが（その横断部に橋SX三九二〇が架かる）、それにSD三九〇五AがT字状に合流しており、また新しい方の溝SD三九一一BとSD三九〇五BとはL字状に接続する。木簡はSD三九一一Bから一二点、SD三九〇五Bから一点が、いずれも接続部近辺で出土している。なおSD三九一一Bは幅一・三m、深さ八〇cm、堆積土は四層に分れ、SD三九〇五Bは幅一・六m、深さ八〇cmで、堆積土は三層に分れ、ともに素掘りの溝である。

8 木簡の积文と内容

SD三四一〇が、SD一二五〇へ流入し、さらにその流れがSD四九五一へ流れ込む。従ってSD四九五一出土木簡には、SD三四一〇↓SD一二五〇↓SD四九五一の流れのものと、SD四九五一そのものの上流からのものがある。またSD四九五一と、SD三四一〇とSD一二五〇の合流点の堆積土はともに同じ層序で木簡出

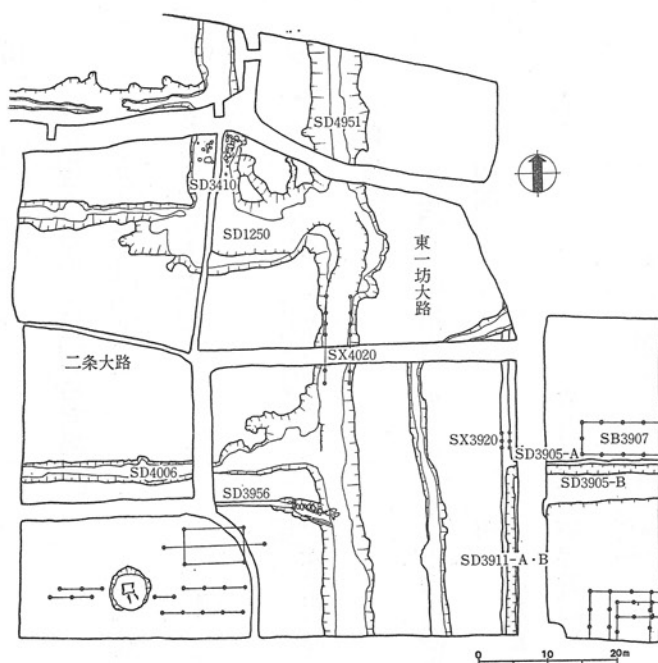
土層位も同一であり、基本的には共通のものと考えられる。

ところで、SD三四一〇・SD一二五〇合流点付近と、SD四九五一出土木簡の年代については、SD三四一〇・SD一二五〇合流点付近からは、宝亀五年紀伊国調塩荷札⑩、宝亀六年文書⑫、「近衛」府とある木簡⑬など、またSD四九五一からは、宝亀五年信濃国衛土養物荷札⑭がみられるなど、年紀のある木簡は、宝亀年間に限られる。なおSD四九五一からは、和同開珎と長年大宝、寛平大宝などの銭貨や、一〇世紀を降らない唾壺などの土器の出土をみ、またSD三四一〇・SD一二五〇合流点からは、和同開珎、神功開宝、隆平永宝、富寿神宝などの銭貨が出土しているところから、これらの溝は平安時代前期までで存続していたことがわかるが、木簡については年紀が宝亀に限られることからみて奈良時代末期までのものと考えられている。しかし、ときどきの溝浚渫にもさらい残されたと思われる郡・里表記の庸米荷札⑮など時代的に遡るものも少数みられる。

SD四九五一出土木簡で注目されるのは、「春宮」(3)や春宮坊被管の官司(主鑒署 (1)(2) 名がみられることである。またSD三四一〇・SD一二五〇合流点からも「主工署」⑯とある木簡がみられることから、SD四九五一、SD三四一〇の上流地域に春宮坊所在の可能性が考えられている。墨書土器にも「主工」とあるものが見られる。春宮坊とその被管は常置でなく、皇太子のいる時期のみ設

置されたが、奈良時代後期で該当する皇太子は、他戸、山部、早良親王で、そのいずれかの春宮坊であろうとされる。

またSD四九五一からは、利木・楯の請求文書(7)、柎や歩板などの語句がみえる文書断片(9)などがみられ、これらは溝上流で行われた奈良時代末期の造営を示すものである。



第32次調査区木簡出土遺構図

- (8) 「可召造東大寺司」^{〔工カ〕} ×
 「^{〔反用カ〕}間度六荷^{〔中カ〕}」
 (114) × 16 × 3 019 三三六六号
- (9) 五六寸桁十四枝 歩板十板 (148) × (13) × 3 081 三三六七号
- (10) × 荷勅旨進
 ×^{〔反用カ〕}間度六荷^{〔中カ〕}
 ×^{〔荷カ〕}丈部獲万呂 三^{〔荷カ〕} (116) × (24) × 4 081 三三六八号
- (11) 「進送從料三斗一升二合^{〔三カ〕}十一日各日飯六升充^{〔三カ〕}」
 「少尉殿料 六月廿八日會祢」
 272 × 23 × 5 011 三三六九号
- (12) 「陰陽師給二升^{〔成〕}成^{〔成〕}成^{〔成〕}」
 西宮女^{〔女カ〕}宣^{〔女カ〕} 十月六日^{〔宣〕}
 「好明妹^{〔鷹〕}鷹」
 276 × 37 × 7 011 三三七三号
- (13) 大哥十七 (103) × 13 × 3 081 三三九二号
- (14) × 井郡穂科郷衛士神人
 「養^{〔布カ〕}六^{〔段カ〕}寶龜五年」
 (115) × 25 × 3 019 三三九四号
- (15) × 國^{〔哲多カ〕}郡各田部里各田部虫
 「^{〔二人カ〕}庸米^{〔庸米〕}五斗八升」
 (133) × 22 × 4 039 三三九五号
- 溝SD三四一〇・SD一二五〇合流点
- (16) 燒炭一人 將監紀朝臣曹司一人 (206) × (11) × 9 081 三三五六号
- (17) 衛門府 (60) × (17) × 2 019 三三三七号
- (18) 大尉^{〔御カ〕} × (59) × 32 × 1 081 三三三八号
- (19) 「火頭若倭部足嶋 額田部庸^{〔取カ〕}」
 葛木生 丈部嶋足 衛士 額田部小國
 衛^{〔部嶋〕}部嶋^{〔部嶋〕}
 「衛 宅部^{〔息カ〕}万呂^{〔告カ〕}生部^{〔告カ〕}人」
 津守生 火頭中臣廣成 生部^{〔告カ〕}人
 石部字人
 214 × 35 × 3 011 三三九六号
- (20) 二升^{〔八カ〕} 一升 主工署四升
 × 月廿五日 (108) × (25) × 4 081 三三九七号

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『平城宮第27・32次発掘調査概報』（一九六六年）

横田拓実「昭和40年度平城宮出土の木簡」（『奈良国立文化財研究所年報 一九六六』一九六六年）

石井則孝・三輪嘉六「昭和40年度平城宮発掘調査概報」（同右）

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報 四』（一九六七年）

同『平城宮木簡 三』（一九八一年）

（綾村 宏）

木簡学会役員

会長	岸 俊男	平野 邦雄	岡崎 敬
副会長	大庭 脩	岩本 次郎	鬼頭 清明
委員	青木 和夫	狩野 久	田中 稔
	門脇 禎二	田中 琢	早川 庄八
	佐藤 宗諄	直木孝次郎	
	坪井 清足		
	原 秀三郎		
監事	関 晃	土田 直鎮	
幹事	綾村 宏	加藤 優	柴原永遠男
	佐藤 信	館野 和己	寺崎 保広
	東野 治之	橋本 義則	町田 章
	和田 萃		